夢童

菅波　茂

国際協力50周年記念シンポジウム

今月15日。国連大学ウ・タント国際会議場で国際協力50周年記念シンポジウムが開催された。支援国の日本からは外務省経済協力局審議官、被援助国からはブラジル、フィリピン、スリランカそしてタンザニアの大使が参加した。コメンテーターはNGO代表としての私、日本経済新聞社、そして国際協力機構（JICA）の方が参加して討議が活発に行われた。1954年のコロンボプランから始まった日本の国際協力50年の歩みとその成果、加えて今後の援助の在り方について、会場からの質疑も加えて意義のある時間であった。ブラジル大使は現在の被援助国から援助国としてのブラジルの役割を説明した。フィリピン大使は国際協力の意義を将来のアジア経済統合の役割にも波及させるという壮大な視点を披露した。タンザニア大使は、何故に日本はアフリカの援助をするのかという基本的な問いからアフリカ支援の必要性を説明した。スリランカ大使は1954年の首都コロンボで国際協力の枠組みが決定された歴史的経緯から国際協力の意義と必要性を説明した。

私はコメンテーターとして下記の3点について述べた。

①何故に日本ではNGOが税金を使った国際協力に参加するようになったのか。

②何故に日本人の私たちがあなたを助けるのか。メッセージの重要さについて。

③相互扶助にもとづいた人道援助の3原則。援助国と被援助国の関係について。

最初の①について。90年の湾岸危機の時に日本は、140億ドルというおよそ1年分の国際協力の金を提供したが評価されなかった。「顔の見えない日本」というパニックが日本中を襲った。外務省のNGOに対する公的支援が加速した。税金を国が管理しない団体が行う教育や慈善事業に使用してはいけないと憲法に定めてあるのにもかかわらずである。日本のNGOは国際社会において「顔の見えない日本一」の顔が見えるようにする責務がある。

次に②について。現在、新潟県中越地震発生による多くの被災者に対して9年前に発生した阪神大震災の被災者だった人たちが「困った時はお互い様」の相互扶助精神で支援活動をしている。欧米の人権に対して日本は相互扶助をメッセージとして発信すべきである。

最後の③で重要なのは「援助を受ける側にもプライドがある」である。友人として相手のプライドを尊重するべきだ。賢者は歴史に学び、愚者は自分の経験からしか学ばない。あなたが私を助けてくれた事実は歴史にある。

会場からの質問に答えた。「質のいいプロジェクトとは何か」に対して「質とはコンセプトに基づいたという意味である」と。経済の悪化により国際協力の資金力の減少が予測される日本にとってコンセプトの開発こそ新機軸である。AMDAは紛争に対して医療和平、災害に対してAMDA多国籍医師団、そして貧困に対してAMDA健康開発銀行などのコンセプトを開発して実施してきた。今後も時代の要求に応えられるAMDAとして全力を尽くしたい。皆様のご理解とご支援をよろしくお願いしたい。

（アジア医師連絡協議会代表）

＝題字は筆者